

令和2年度南国市教育委員会
の事務点検・自己評価に係る
南国市教育委員の所感

1. 「1 教育委員会の活動」及び「2 教育委員会が管理・執行する事務」について

○いつもとは違う日常の中、事務局が一体となって学校の支援に当たることができていた。事務局の支援と適切な助言によって、困難な状況に対処できていた。
○コロナ禍の中、予期せぬことも多い年であった。年度当初の学校訪問については、その在り方を検討し、改善に努めたが、コロナ禍の影響で実施できず、また研究発表会や各種の行事への参加も制限される中、教育委員会と教育現場の連携を保つため、事務局がoneチームとなって、それぞれの立場で精一杯目標達成のための努力を惜しまず続けてきたのは、大いに評価すべきである。

○本年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、学校の臨時休業による学校訪問が中止となった。各学校や幼稚園の現状の把握や経営方針、危機管理体制等の把握が出来る良い機会であったことは残念である。特に、異動により新しく赴任してきた管理職の先生方との意見交換ができなかったことは非常に残念である。

○学校訪問ができなかったことは残念であるが、当初の目標に沿って各学校が創意工夫のもと、子どもの多面的な成長を支えていることは十分理解できた。令和3年度は是非学校訪問をして、元気な子どもたちの姿を見てみたい。

○今年度はコロナ禍で学校訪問も中止となり、学校現場を見に行く機会が少なく、学校の取組に対する成果や課題について、校長先生方お一人お一人にお聞きすることができず、大変申し訳なく思う。来年度も同じような状況下ではあると思うが、コロナ禍でもできる学校訪問の体制づくりについて検討していただきたい。

○コロナ禍が長期化する中、商店の閉鎖、企業活動の縮小・倒産、リストラ...等による家庭の収入減に起因するネグレクト・児童虐待・万引き等も心配される。民生児童委員、福祉事務所、警察署等の機関とも連携を図りながら、コロナ対応特例援助策のような支援を図っていく必要があると思われる。

○コロナウイルス感染症のため各研修会等もことごとく中止になった中、11月13日の「土長南国教育委員会連合会」視察研修での本山小学校の公開授業と、12月7日に久礼田小学校にて開催された「GIGASクール構想」に向けての公開授業を参観できたのが幸이었다。

○運動会は何とか開催できたが、例年同様の参観が叶わず短時間の参観になって残念だった。

○教科書採択については、十分な調査研究がなされ、採択希望理由も明確であり、適切な採択であったと感じられる。

○学校の適正規模化について。南国市では十市小学校だけが適正規模であるが、それぞれの学校が規模や地域に合わせた特色ある効果的な学校運営がなされている。人数合わせの統廃合はすべきではないと思う。特認校の奈路小・白木谷小をはじめ、大篠小の区域外通学による隣接校への通学も効果も効果も上げてきている。香長中のマンモス化、香南中の生徒数激減についても、香長中の校区外通学、香南中の特認化を進めていくとよいと考ええる。

○香長中、香南中、北稜中の修学旅行は三年次に延期、その他小学校の修学旅行も延期になっていくと聞いているが、延期や中止によるキャンセル料が発生した場合は、市の補助をぜひお願いしたい。

☆ヒヤリングや校長会の場で、校長と意見交換をしたかったが、それも叶わず非常に残念であった。

2. 「3 教育委員会が管理執行を教育長に委任する事務」について

(1) 就学前の保育・教育、学校教育に関すること

① 就学前の保育・教育について

○5月の学校訪問でたまたまな幼稚園等訪問ができなかつたため、実際の幼児の様子を見ることができず、残念であった。
○本年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、残念ながら幼稚園行事も保育園行事も中止のごとく中止になった。行事は小学校との連携や地域との交流には欠かせないものであり、大変残念である。

○新型コロナウイルス感染症拡大がなければ、地域との交流や行事も当初予定どおり進められ、成果をあげていたと思われる。

○コロナ禍だからこそ、保幼小の連携がより大切になってくる。今年度のように入学してもすぐ休校になったり、クラスや先生になじむまでに時間がかかるケースもあり、保護者も大きな不安を抱えている。また、先生方もコミュニケーションがうまく取れず、ご苦労されることも多かったように思う。オンライン会議なども視野に入れながら、保幼小の先生方の交流の機会を持つなど、新しい形で連携できる体制づくりを検討していただきたい。

○たまたまな幼稚園の保育・教育活動の充実ぶりは定評のあるところだが、保護者のニーズに合った延長保育、長期休業中の保育等の課題があり、園児の減少傾向が見られるようである。今後の運営の在り方を早急に検討し、可能な限りニーズに応じられるようにしていきたい。

② 学校教育について

○教育のICT化には大きな可能性がある。答えだけを求めるなら従来の黒板やプリントを使った授業でも可能で、ICTと「考える」授業をいかに組み合わせていくか、研究が必要である。

○コロナ禍の中で、ICT支援員の配置やネット環境の整備等、「GIGAスクール構想」への取組が始まったのは嬉しい。

○教育のICT化については手探りの状況であり、学校を越えた研究の場を広げることを探っていただきたい。

○一人一台端末を活用した授業では、久礼田小学校での授業を見せていただき、子どもたちが生き生きと学ぶ姿を間近で見ること、これからの授業がどう変化していくのか具体的にイメージすることができた。

○その中で、今何をやる時間なのか（ノートに書く、話を聞く、パソコンを使う等）、一人ひとり考えて素早く切り替えられる集中力。先生方の子どもを引き付ける指導力。双方向のコミュニケーション力。また、使い方が分からない時やエラー発生など、すぐに先生にHelpを出せる関係性づくり。クラスで困っている友達に周りがすぐに気づき助け合えるクラスの雰囲気づくりも、土台として必要である。さらに、発表が苦手な子どももパソコンを使って意見を書いて出し、すぐにクラスで共有が可能のため、全員参加のどの子どもも取り残さない授業ができることにも繋がる。そして、不登校支援として、自宅や教育支援センターふれあいにいながら、クラスの授業に参加したり、別室登校をしながらクラスの授業に参加することもできる等、色々な面で活用し、子どもたち一人ひとりに会った学びの多様化に期待したい。

○ただし、その実現のためには先生方への技術的な面でのサポートが重要となり、ICT支援員の増員は必須となる。また、机の上にパソコン・教科書・ノート・筆記用具などを出して使うようになるため、従来の机では小さすぎる。GIGAスクール構想に向けて、教室内の整備も考えていかなければならない。

○コロナ禍の影響もあってICT機器・ネット環境や端末が急速に整えられてきた。これを活用していく必要がある。けれども、指導する先生も十分活用することができないのが現状ではないだろうか。その機器を活用する技能を先生や児童・生徒にも身に着けさせるために、早急に支援員を各校に派遣する必要がある。市費でも投入できないものか。

○学力の向上には、主要5教科以外の授業の改善も必要になってくる。それらの教科でも積極的にICT化に取り組み、改善を図ることが必要になってくる。

- 不登校対応教員の配置は、今年度とても心強かった。遅れてくる児童にも、玄関前で一人ひとりに声をかけて温かく迎えてくださっていただき、家庭訪問に走り回ってくださっていただき、日々の対応に感謝している。不登校児童にとっても「学校に行かない」選択は、不登校への第一歩を守るための最終手段。その子どもたちのSOSの受け取り方は間違えないように、一人ひとりの想いに、まずは耳を傾けることが必要である。
- 働き方改革の一つとして、中学校に部活動指導員を中学校（香長中・鳶池中・香南中）に4名ほど配置したと思うので、その結果を検証し、来年度に向けた計画と予算を検討する必要がある。
- 本年度は実践的な防災学習の場に居合わせることができなかつたことが大変残念である。
- 給食費の公会計化については、教員が関わる時間を減らすことで、子どもにも向き合える時間を多く確保できることから、うまくシステムを動かすことが望まれる。
- 小学校の給食調理場の老朽化、調理員配置の困難性などから民間委託か給食センター方式かを検討していく必要がある。
- 全国学力学習状況調査等クリアするため多くの時間が割かれている。全体の流れとして仕方のないことかもしれないが、あえて答えが一つにまとまらないもの、答えが拡散していくもの等にも怖がらずに挑戦する子どもを育てていく必要もあると考える。
- それぞれの研究指定校の取組は素晴らしい。人事配置とあわせ、南国市全体にその成果が広がることを望まれる。
- いつもの日常とは違う光景の1年であったが、この経験は必ず生かすはずであり、将来に向けてマイナスにならないと信じる。
- コロナ禍の中にあっても、それぞれの学校が校長先生を中心に教職員全員が力を合わせて、様々な工夫を凝らしながら、授業実践、行事、部活動を行ってきた。
- コロナ対策として、マスク、手洗い、消毒はもちろんのこと、教室の空気入れ替え、三密を避けるための工夫（学級の机の並び替え、クラス分割、午前と午後二部制）、ICT機器の活用・・・等、大変な神経の使いようであった。特に大規模校は大変だったと思う。本当にご苦労様と言いたい。（これからもまだまだ続くので、気を緩めず頑張ってください。）
- 研究所はほとんどの活動を休止して、今後の在り方を模索しているところだが、これからの役割として、研究授業のネット配信やZoomにより全学的な授業研究会をやるような工夫も考えていただきたい。機器の活用にも慣れるし、足を運ばなくても全学的な授業研究会や交流会が今ある機器でできるのだから、ぜひやって欲しい。若い先生方も多くなってきてきただけに、教材研究、指導の技術、児童・生徒との対応の仕方等を学ぶ機会にもなる。将来的には隣接校との合同授業をすることも試みてはどうだろうか。
- 夏季休業中のプールの開放について、しっかりとした管理体制を保護者・地域の協力を得ながら整え、開放してほしい。

(2) 生涯学習に関すること

①各事業の推進について

○地域学校協働本部事業については、参加していない人には何をしているか分からない事業になる恐れがある。参加することの楽しさや達成感、満足感などを広く知らせる必要がある。

○中止や規模縮小になったものも多く、十分な成果をあげられなかったため、残念であった。

○成人式を中止にしたことによる混乱は各所で起きている。特に女性は、1年前から成人式に向けて、着物・ヘアメイクの予約をしており、式典に向けて髪を伸ばしたり、心身共に整え心待ちにされてきた中での直前の中止発表。美容室に、「南国市が式典を中止するなら、他の式典を行う市町村のお客様が優先になるので、予約をキャンセルしてもらおうかもしれない」と追い打ちをかけるような心無い対応された新成人もいた。中止の発表が遅かったため、交通機関のキャンセル料がかかる。着物レンタル料も返却されずといった金銭面での負担は大きかった。それでも悔しさもこらえて、市役所前のフォトスポットで笑顔で写真を撮ってくださった新成人の皆様のことを想うと心が痛んだ。

○南国市としても、新型コロナウイルス感染症の拡大防止と新成人の命を守るための苦渋の決断であったが、この新成人・ご家族の想いに寄り添う対応ができていたのか。行政に聞こえてくる声はほんの一部であることを忘れてはいけなと強く思う。

○南国市のまちづくりは、若い世代の地域愛醸成を軸とした定住促進に取り組む計画である。これからの未来を支えていく新成人の皆様にとつて、また、帰ってきたくなる、住み続けたい南国市になっているだろうか。今からでもできることは本当はないのだろうか。

○「地域学校協働本部事業」が新たに市内4中学校でも事業開始したが、地域と学校をつなぐ役目や健やかな子どもたちの成長を見守る体制構築のため大変嬉しい。

○中央公民館と大篠公民館を合築した施設の整備は、防災拠点としての機能も備えるということで大変心強い。

○吾岡山の遊具施設新設 年齢の応じた遊びができて工夫がなされ、安全面にも配慮されている。このような時だからこそ、戸外に出て遊ぶ楽しさを子供たちにも伝えられる。

○国分寺の発掘調査がどんどん進んでいる。新しい発掘結果を多くの市民にも広報紙などで伝えていって欲しい。6年生や中学生の歴史学習にも生かして欲しい。

○南国市出身の「山本忠興」についても早稲田大学の電気工学者で、多くのオリンピック選手を育成した人物であり、オリンピックの年であるので、広報で取り上げて欲しい。・・・。

②取組の状況について

- 中央地域交流センターの建設が進んでいる。立派な「箱」にふさわしい内容にするため、ひとつにまとまる利点を生かした活用ができるよう、充実したものにしたい。
- 登下校時のパトロールカーによる巡回では、いつも子どもたちに温かく声をかけながらパトロールしていただき、子どもたちも大きな声で挨拶したり手をふったりしている姿を見て、ほほえましく思う。子どもたちにとって、親しみやすい姿で見守っていただけたことは、本当にありがたいことである。日々の取組継続に感謝している。

3. その他

- 国の取組、県の取組、市の取組と、教育行政はともするとビルドの連続になる。学校はそれらを受け取り実施していくため、いつの間にか「しなければならぬこと」が肥大してくる。いかにスクラップするかが学校や子ども「ゆとり」に繋がりが、さらには「学ぶ力」の育成に繋がる。大きく目標を定め、切り捨てるべきは大胆に切り捨て、大切なことに注力することが大切なのではないか。
- 不登校支援に必要なことの一つに、「保護者支援」があると思うが、先生の立場ではなかなか家庭の問題に立ち入ることは難しい現状が見取れる。しかし、支援の必要な子ども達の後ろには、必ず支援の必要な保護者がいる。学校と家庭との中立の立場から支援ができる人材が必要だと感じている。不登校対応マニュアルなどよく目にするが、マニュアル通りの対応では逆効果になることもあり、毎日の家庭訪問や学校からの毎日の電話に疲弊し、さらに、学校と関わることを拒絶するようになってしまう保護者の声をよく聞くことがある。一人ひとり不登校の背景、家庭の状況は異なるため、それぞれに合った不登校支援が必要。
- コロナ禍の中で、新しい学校の在り方が問われる事態となった。今までの学校教育の当たり前が、当たり前でなくなってしまうが、これは長く続いて来た教育の転換期と前向きに捉え、前例にとらわれないことなく、新しい取組を進めていくべきである。
- 来年度は「withコロナ」の学校教育の取組をスピード感をもって進め、より安心安全な学校づくりをしていく必要性を感じている。また、今まで以上に人と人とのつながりが大切に考えていく必要性も感じる。コロナ禍でできてしまった人と人との距離のようにならないうに、心まで離れてしまわないように、「心を育てる教育」を考えていきたい。
- 本年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、「青少年健全育成大会」や「小学校駅伝競走大会」をはじめ、「成人式」も中止になった。来年度は普通の日常が取り戻せるようお願いしてやまない。
- 避けては通れない「南海トラフ地震」や、日常でも起こりうる火災等の災害に備えるために、来年度は本年度できなかつた防災教育のさらなる推進が必要である。